

自分の流儀を信じて前進する

後悔しない生き方も、さすが井山流！

父親が買ってきたテレビゲームの囲碁ソフトに興味を持った5歳の井山裕太少年は、半年もすると父親を破るほどの腕前になりました。それから25年。30歳の井山さんに囲碁人生を振り返っていただきました。



小学6年でプロ棋士に

わが家のテレビゲームには、囲碁ソフトしか付いていませんでした。囲碁ゲームをしているとルールを覚え、半年ぐらいで父に勝てるようになりました。それを知った囲碁好きの祖父が、近所の碁会所に連れて行ってくれるようになり、囲碁の楽しさ、勝つことの嬉しさを教えてくれました。

小学1年の時、囲碁のテレビ番組に出演しました。視聴者参加型で、アマチュア同士の対局が名物の番組です。対局を終えると、解説をされていた私の師匠の石井邦生先生(棋士9段)が目留めてくださり、対局させていただきました。その時の出会いが、私の原点です。

石井先生に定期的に教えていただくようになり、小学生の全国囲碁大会で2連覇をした後、「そろそろ、プロをめざしてみてもいいのでは？」という言葉で石井先生が掛けてくださり、棋士をめざす人が集まるプロの養成機関の院生になりました。

院生になると、好きでやっていた囲碁とは少し感覚が違いました。院生の一番上のAクラスには早く上がれましたが、簡単には勝てなくなりました。院生で、年間で1位になると、プロ棋士になります。小学5年の時は、終盤までいい成績だったのですが、最終的に1位になることができず、すごく悔しい思いをしました。それから1年間、友達と遊ぶ時間を減ら

Iyama Yuta

1989年生まれ、大阪府出身。石井邦生九段門下。2002年入段後に2段、2005年七段、2009年9段。2013年の囲碁史上初の7冠同時制覇に続き、2016年にも2度目の7冠を制覇する。通算成績600勝を達成。2018年、国民栄誉賞受賞。「井山裕太七冠達成への道(日本棋院)」、「勝ちきる頭脳(幻冬舎)」など著書多数。

自分に返って来るからです。

し、囲碁の練習時間を増やしました。負けた悔しさから、プロ棋士になる自覚が芽生えたように思っています。翌年は、年間1位を獲得しプロ棋士になりました。

後悔しない生き方を身に着ける

プロ棋士で勝ち続けると対局が増えます。そうなると、学校を早退したり、休む日も増え学業との両立が難しくなりました。中学卒業時には、担任の先生も理解してくれましたし、両親の反対もなかったため、迷うことなく高校へ進学せずプロ棋士としての道を選びました。

プロの世界では、誰にも頼ることができず、対局中は自分の意思で打つ手を選びます。それが身に着いていたので、人生についても自分で決めました。自分で判断するのは、後で悔いが残らないようにするためです。今も、私のルールの基本です。

対局でも非常に悔しい思いになることがあります。それは、悩んで選んだことに自分自身が納得していない時です。ミスをして負けても、誰にもその悔しさをぶつけられません。すべてのミスは、すべて



囲碁サロンで大人と対局する井山裕太さん(小学2年)

また、対局中に2つの道が見えていて、どちらを選ぶか悩んだ時は、「どちらが自分に合っているのか」と感覚的に選択しています。「自分の感覚を信じて選ぶ」。そうしなければ、負けた後にすごく後悔するからです。反面、勝ち負けがはつきりする囲碁は、勝った時の喜びもひとしおで、自分の思い描く内容が残せた時は、大きな達成感に包まれます。

勝つ秘訣は、とにかく勝敗を引きずらないこと。人間なので体調や気分が常に

妥協を許さず、粘り強く戦う

一定ということはありませんが、どのような状況でもその時のベストを尽くすことが大事だと思います。囲碁は、オフシーズンがなく1年を通して大きな試合が続きます。体調管理はもちろんですが、気持ちの面でもうまく切り替えて、次の対局には真つ新たな気持ちで挑むようにしています。

七冠獲得は、とにかく勝ち続けることが条件でした。タイトルを持つようなトップ棋士の技術の差は紙一重で、一つの小さなミスが痛手になります。3年前の七冠達成時は、決していい状態とはいええず、はつきりと負けを覚悟した対局でも相手のミスを待ち、我慢を重ね粘り強く打つ手を吟味し続けた結果、あり得ないような不思議な勝ち方をしました。何度かそのような対局を重ねるうちに、いつの間にか運も引き寄せていたように思います。

対局中は、いつもギリギリの勝負です。例えば形勢のいい時は安全に勝ちたいという心理が働き、妥協した手が積み重なると逆転されることもあります。

で、私としては、どんな場面でもなるべく最善手を求めることを心掛けています。

国際戦でも自分のスタイルを見失わないようにして臨んでいます。国が奨励し選手層の熱い中国では、毎年のように強い棋士が頭角を現します。彼らは、実戦で採まれ勝つことが最優先です。日本は、昔から美しい棋譜を残すことが美德とされてきましたから、潔く負けを認めることもプロとしての礼儀のように捉えられています。しかし、世界で戦うには、美德では勝てません。勝つチャンスがあれば、粘り強くことごとく攻め続ける姿勢を学びました。

囲碁の対局は、無限です。10年20年先も常にレベルアップを図り、自分らしい流儀の囲碁を打ち続けたいと思っています。